

5. 田植機

(1)「滑る」事故

5. 田植機 (1)「滑る」事故

40

田植機に肥料を補給するため、20kgの肥料袋を抱えて田植機前部に乗ったところ、足を滑らせて転倒し、田植機に腰と背中を強打した。脊椎骨折、打撲。

(平成25年5月下旬 午前9時30分頃分 男性・56歳)

事故の概況

田植機（乗用ポット式、6条植え、使用年数6年）の車体前部にある肥料ホッパに、化成肥料を補給しようとしていた。20kg入り肥料袋を抱えて、田植機のボンネット左脇のステップに左足を、その左側にある金属製のステップに右足をかけたところ、右足がステップの縁で滑り、ボンネット左脇のステップに尻餅をつき、背中を田植機の構造物に強打した。

腰と背中を痛めて、その日と翌日は田植え作業を行った（翌日は痛みのため、苗補給の軽トラックの運転のみに従事した）。翌々日になって、妻の運転で近くの整形外科に行き、大きな病院でMRIを撮ってもらったところ、脊椎圧迫骨折が判明した。当初は、腰よりも打撲した背中の方が痛かったが、被害者の体重（92kg）に加えて20kgの肥料袋による衝撃の方が大きかった。3カ月間の通院を強いられたが、労災保険とJA共済に加入していたため、経済的な損害は免れた。



20kgの肥料を抱え、左脚を機体脇のステップに、右脚を肥料供給用のステップにかけて肥料をタンクに入れようとして、足が滑り、背中をボンネットに強打。

事故原因と対策

田植機事故の典型的事故の一つとして、「滑る」がある。履き物としては、一般的に軽量であるので水田長靴を着用するが、水田に入ると濡れ、かつ機体が金属製、またはプラスチック製で滑りやすい。とくに、田植えの際は、苗場箱や肥料などの重量物を不自然な姿勢で持つため、滑って転倒したり機体に衝突するなどの事故が発生する。

今回の事例も、水田長靴、重量物、不自然な姿勢となり、事故が発生している。また、今回は人手が少なかったという焦りも事故の誘因と考えられる。次年度からは、事前に計画を立て、人手を増やすとのこと。また、滑りにくい水田長靴や田植機のステップ等の素材についてもこれから検討が必要と考えられた。

(2) 積み降ろし中の事故

5. 田植機 (2) 積み降ろし中の事故 ①

4 1

軽トラックに苗箱を乗せ、その後ろに2条植えの田植機を乗せ、その両側に1本ずつ鉄製の歩み板を乗せたところ、弾みで歩み板が倒れ、軽トラックのあおりとの間に左手薬指を挟み骨折。
(平成26年5月中旬 午後3時頃 男性・81歳)

事故の概況

自宅近くの水田(18a)で田植を行った。機械は10年前に購入したポット植えの2条植え田植機で10年前に購入したもの。自分は苗箱を渡す作業や指導が主な仕事で、田植は午後3時頃終了。その後、軽トラックに苗箱、田植機を甥っ子たちが乗せ、せめて、歩み板ぐらいは自分が運ばなければと、田植機の左右に1本ずつ乗せた。鉄製の歩み板の重さは1本15.4kg。2本目の歩み板を軽トラックの右側に乗せ、田植機側に支えられるように置いたつもりだったが、何かの拍子に軽トラックの横のあおりの方に倒れた。たまたま左手を軽トラックのあおりの上をつかむように置いていたため、その鉄製の歩み板の角が、左手指を直撃。

もしも、歩み板を軽トラックの横のあおりと平行に積んでいたら、薬指だけでなく、中指も人差し指も負傷した可能性がある。少し、斜めに積んでいたために、中指と人差し指は、大きな怪我をせずに済んだものと思われる。

歩み板は40年ぐらい前に購入した。手入れや保管がいいのか、全く傷んではおらず、歩み板の角が薬指に当たったとき、爪のつけ根のところ食い込むようになった。

自宅の戻り、近くの病院に電話をしたところ、日曜日なので外科医がいないということで、総合病院に連絡をし、娘さんの車に乗せてもらい受診し、治療した。



軽トラックに田植機を乗せ、その脇に棧橋を田植機側に立てかけるように置いたつもりだが、あおり側に倒れ、たまたまあおりに左手を置いていて、薬指が挟まれ、薬指骨折

事故原因と対策

歩み板は、鉄製でなくアルミ製のものも多く販売されている。その重さは1本5.0kgとほぼ3分の1と軽量である。また、手袋の着用などで重症化を防ぐこともできたと考えられる。

軽トラックに乗せた乗用田植機を降ろそうと、軽トラックの横から左手を伸ばして操作したとき、ぎくっと左肩を捻った。(平成26年5月中旬 午後2時頃 男性・80歳)

事故の概況

自宅の倉庫から田植機を出そうとして、横にあったコンバインに田植機のベルトが当たり、外れてしまった。機械の専門店で修理してもらうため、軽トラックに積み、搬送。専門店の入り口は少し登り坂であったので、その上の平坦な場所になっている場所に軽トラックを止め、田植機を下ろそうとした。

田植機は乗用の4条植え。軽トラックに積み降ろしするときには田植機には乗らず、軽トラックの横に立って手で操作をしている。軽トラックの荷台までは地面から64cm、田植機のクラッチの握り手までは92cmで、下にいて操作をするには、156cmが必要である。本人の身長は162cmなので、斜め上方のクラッチを握って操作するには限界の高さであった。さらに右手でブレーキ操作をするには不自然な体勢になった。

降ろす作業中、左手がぎくっとなり、ビシッという音がした。重量がかかったわけでもなく、特別な負担がかかったわけではないが、ねじれた感じで痛みが走った。田植機は修理をお願いして自宅に帰った。田植機は後で届けてもらった。

帰りの軽トラックの運転も、左手がうまく効かず、クラッチは右手で操作。その日は寝れば治ると思いがまんした。しかし、痛みが引かず、翌日の朝、かかりつけの診療所を受診。レントゲン撮影をし、骨折はないことを確認した。1週間後エコー、MRIなどをとり、湿布薬と痛み止めが処方された(左肩腱板損傷)。

安静にするようにと言われたが、田植えを他人に頼むこともできず、受傷後3日後に行った。1人で全てをやった。苗運びや苗箱の配置、運搬、田植え、箱の洗浄作業など、左手がうまく動かなかったので、時間がかかった。



軽トラックに田植機を乗せ、軽トラの脇からレバー操作をしていて、体が乗り出し、かつ捻るようになって、無理な姿勢となり、肩がギクツとなった。肩部腱板損傷。

事故原因と対策

軽トラックの上に乗った乗用田植機に自分が乗って下ろす作業をすることは危険がある。軽トラックの横にいて操作することは致し方ない作業とはいえ、不自然な姿勢にならざるを得ない。身長の関係もあるが、横1mぐらいの間はビール箱などを踏み台に4個ぐらい用意すると、操作はやりやすくなったと考えられる。

また、低荷台の軽トラックを用意するのも一案である。さらに、リモートコントロールができる装置が付属されれば、乗せることや下ろすことだけでなく、危険な畦越などにも応用することができる。